

アメコミ映画におけるジェンダー表現の 多様化と受容意識

長谷川敬太

本研究の目的は、近年のアメコミ映画におけるジェンダー表現の変化を明らかにし、その変化を観客がどのように受容しているのかを分析することである。2010年代後半以降、女性ヒーローの単独作品が増加し、従来の「守られる女性像」から脱却する動きがみられる。しかし同時に、過度な政治的メッセージ性やキャラクター改変への反発も存在する。本研究では、先行研究の整理、2000年以降のアメコミ映画のジェンダー表象分析、観客がアメコミ映画に対してどのように感じているかに関するアンケート調査という三つの方法からこの問題を検討した。

作品分析では、興行収入上位作品15本を対象に、主人公の性別およびベクデルテストの可否を整理した。その結果、依然として男性主人公作が多数を占める一方、『キャプテン・マーベル』『ブラックパンサー：ワカンダ・フォーエバー』など女性・マイノリティが主役の作品も興行的に成功していた。また、複数ヒーロー作品では女性キャラクターが活躍する場面が増加し、旧来の男性のヒーローが活躍するような場を女性ヒーローにも出番が与えられるような傾向が見られ、ジェンダー表象が多様化しつつあることが確認された。

アンケート調査では、回答者の多くがアメコミ映画における女性キャラクターのイメージは「強い・カッコいい女性像」だと感じており、女性の主体的な行動を肯定的に捉えていた。一方で、「女性はサポート役が多い」「戦闘描写に男女差がある」など、旧来のジェンダー役割が残存しているとの指摘もみられた。また、望ましい女性像として「多様で幅広い女性像」「主体性のある女性像」を求める声が多い一方、「現実的な身体差を反映すべき」「ジェンダーを過度に意識しすぎない表現がよい」といった意見も存在し、観客の受容にも多様な考え方が存在し、「無理に女性を出さなくてもよい」という考えや、「旧来の表現のままにしてほしい」などの観客が求めるものは多岐にわたることが示された。

以上の結果から、アメコミ映画のジェンダー表現は確実に多様化している。一方で、その変化に対する観客の受容は一様ではなく、女性やマイノリティの主体的な活躍を肯定的に評価する声がある反面、過度な政治的メッセージ性や従来像からの急激な変化に違和感を覚える意見も存在していた。観客は旧来のステレオタイプの女性像をもとにした配役ではなく、作品のストーリー性やキャラクター性との調和を重視した配役を受容しているといえる。